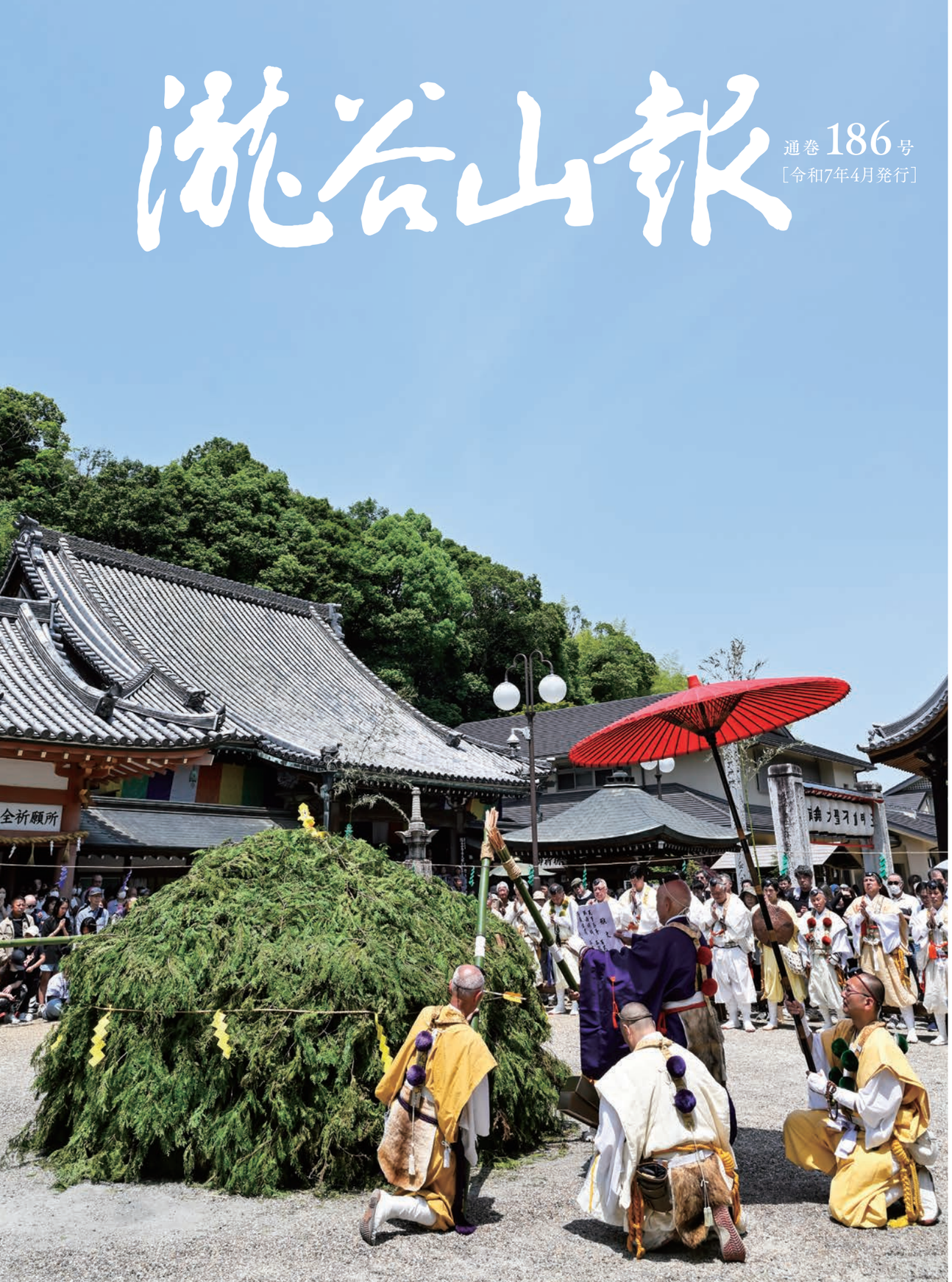
瀧谷山報

通巻186号
［令和7年4月発行］



【今後の当山行事予定】

春季大祭 5月25日

御本尊御開扉大護摩供〔本堂〕
午前 6時　10時　11時30分
午後 1時30分　3時

大般若経転読付大護摩供〔本堂〕
午前11時30分の護摩供と併修

柴燈大護摩供〔境内〕
正午頃開始　午後1時頃点火

瀧不動堂護摩供〔瀧不動堂〕
午前9時頃～午後2時頃　随時

観世音夏まつり 7月13日

施餓鬼回向法要〔客殿大広間〕
午後1時30分より約1時間

清興（落語）
法要お勤めの後、準備が整い次第同会場にて

福引〔寺務棟特設会場〕午前10時頃から

地蔵盆 8月24日

地蔵盆会法要　午後3時30分 予定

日々のお護摩祈祷

土日祝　午前 7時　10時　11時30分　午後 1時30分　3時
平　日　午前 7時　10時　11時30分

交通安全祈願（車のご祈祷）

午前9時より午後4時　毎時0分・30分
毎月第4日曜日はありません。

月例祭（毎月第4日曜日）

御本尊御開扉大護摩供　午前 6時　10時　11時30分　午後 1時30分　3時
瀧不動堂護摩供　午前 9時頃～午後 2時頃
月例祭は交通安全のご祈祷はありません。

行事の予定は変更になる場合がございます。
詳しくは瀧谷山公式ホームページにて随時
ご案内いたしますので、来山前に今一度
ご確認ください。

［令和7年4月発行　通巻186号］
●発行所：瀧谷不動明王寺
〒584-0058　富田林市彼方 1762
電話 0721-34-0028　振替 00930-5-17704
●発行人：荒谷純榮　●編集人：荒谷純榮

夢あれこれ

一月二十二日、新春恒例の「歌会始の儀」が皇居にて催された。今年のお題は「夢」であったが、今回は国内外から一万六千首ほどが詠進された。当日に招かれた召人は日本の古典文学を研究する方であり、この歌を詠まれた。

一人寝の　夜の寝覚のさびしさに
みじかき夢のかけらを拾ふ

詠み人の身の上を知らなくとも、誰もがこうした経験はあるに違いない。わが国の暮らしぶりを思うと、さまざまな事情から独り眠る人は相当数おられるだろう。それは人口が密集する街であろうと、山間や海辺の地でも、はたまたその年齢は老若も問われない。

次のような境遇について見聞したことがある。それは特定の資格を得るために、一定期間を専用の寮で過ごさなければならないお話。慣れない環境下で知らない者同士が集まり、さほど広くもない一人部屋で床に就く。入寮して日が浅き頃は、一日千秋の思いで、とりわけさびしさが募る。やがてその居室があたかも私室のように感じられる頃になると、望郷へのさびしさとは別のさびしさも味わってくる。研修や修練の成果が出せずに焦りや悔恨ばかりが増すことで、異なったさびしさをも生み出すらしい。そうしたたくさんのさびしさを重ねて、たくさんの夢も見たと。それらの夜に見た夢の数だけ、実はたくましく成長していたことを少し経ってから気付いたと体験者はいう。冒頭の歌にも似た思いを抱いて過ごす夜が必ずあったということである。孤独さや寂寥感を夢に重ね合わせた心情であろうか。

少し別の話をしてみたい。鎌倉から室町の頃にかけて夢窓疎石という禅僧がおられた。夢窓は飄々と生きながらも、「七朝の帝師」と称されるほどの信任を得て教導したと伝わるなど逸話の多い傑僧。時は鎌倉幕府の終焉、そして南北朝時代の混迷へとつながる激動期にあった。かの瀧谷山のお不動さまを尊崇した大楠公とも時代を共にしたのが夢窓である。

この僧が風のように雲のように泰然としており、国内各地をしばしば転住する。その高徳を慕って人が寄って来ると、ぷいと姿をくらましてまた転住を繰り返す。決して人嫌いでも厭世的でもない、ただただ身軽で懐深い人物である。その夢窓に『夢中問答集』全三巻という著作がある。九十余りのテーマを収めた仏教質問集の体裁で、初級（上巻）に始まり上級（下巻）に至る含蓄のある内容になっている。上質な解説書も出版されており一読をすすめたい。

今、話題とするのは書名や僧名に含まれている夢の一文字である。仏教における通用な解釈によれば、夢は幻や陽炎などと同じく実体性のないもの、すなわちあらゆる現象はかりそめなものの喩えとして説かれる。しかし夢窓の見方は、その通説をさらに突き抜けてゆく。夢の中で夢を見ること、清浄と不浄、優劣などの価値判断を俎上に乗せて夢の概念を外してゆく。一夜一夜の夢はどれも虚妄にすぎないが、実はそれを上回る迷いの大夢を知らずして一体どうするのだと警鐘を鳴らす。夢中の夢、夢窓の夢の一文字にはそんな禅風が漂っている。そうした思いを凝らすと、夢はただの夢でありつつ、ただものでない夢にも転じる。

真言密教では大切な修行の前夜に見る夢の分析をする。かつてチベットの高僧が「さあ、昨日はどんな夢を見たか」と受者たちに問うてきた。あれこれと報告する者らの意見を聞き終えてから、「夢など見ずにぐっすり寝るのが一番さ」と破顔一笑された。今にして思えば、夢窓の見方とも重なる悠然さがある。

このように夢とは何を物語るのか、問いは尽きない。まどろんで見る春眠の夢をはじめ、この先に見る夢はいかなる類いのものであろうか。さらに問えば、そこから気付かされる視点は人生の拓き方とも相関することだろう。

わたしたちはひたすら無常の中に居続けている。それもまた短き夢のかけらの如きものなのである。最後に夢窓が詠んだ一首を引いて春の名残りを味わいたい。

盛りをば　見る人多し散る花の
あとを訪ふこそ　なさけなりけり

※夢窓疎石　臨済宗の人。建治元年（1275）～観応二年（1351）。顕密二教に通じる。苔寺（西芳寺）や天龍寺の作庭でも名高い。

春季大祭

大般若経転読付大護摩供
柴燈大護摩供

5月25日(日)

来たる5月25日、瀧谷山では、年間最大の行事である春季大祭をお勤めいたします。

午前11時30分の本堂のお護摩では、河内諸大徳ご出仕のもと、大般若経転読付大護摩供が勤められます。大勢の僧侶が『大般若経』を転読する様は躍動的で、普段にも増して荘厳な護摩供です。あわせて、家内安全・身体健全・商売繁昌・眼病平癒など、ご信徒みなさまの所願成就を祈念いたします。

続いて正午頃より、100名にのぼる大峰山修験者により、境内で柴燈大護摩供が厳修されます。山伏行列が法螺貝を吹きながら山内を練り歩き、古式に則った作法を勤める様子は壮観です。また瀧不動堂では随時、当山所属の山伏により護摩供が勤められております。

大般若経転読とは…

600巻におよぶ『大般若経』を大勢の僧侶が読誦します。蛇腹折(じゃばらおり)の経本を、大きく宙に広げ高い位置から落とすようなダイナミックな動きが見どころの一つです。経本が勢いよく捲られることによって起こる風をうけると災難が除かれ、厄除けや長寿のご利益があるともいわれています。

御本尊御開扉大護摩供〔本堂〕

●時刻

午前6時　10時　11時30分

午後1時30分　3時

●ご祈祷料　5000円より

大般若経転読付大護摩供〔本堂〕

午前11時30分の護摩供と併修

柴燈大護摩供〔境内〕

●時刻　正午頃開始

午後1時頃点火

●添護摩木　1本300円

瀧不動堂護摩供〔瀧不動堂〕

午前9時頃～午後2時頃 随時

柴燈大護摩供とは…

山中で採った柴(檜葉(ひば))に火をともし、火中に不動明王をまねいて人々の平安を祈る修験道(しゅげんどう)の儀礼です。一説には、寛平2年(西暦890)日吉大社において初めて勤められたものが嚆矢であるとされます。柴燈大護摩供では、儀礼の意味を訊す山伏問答や、魔物を払い道場を清める宝弓の儀、山中から薪を切り出すことを示す宝斧の儀などが勤められた後、護摩壇から登る大火焔に数万本もの護摩木が投じられ、祈りを込めて炊き上げられます。

観世音夏まつり

7月13日(日)

7月13日(日)、観世音夏まつりをお勤めいたします。

観世音夏まつりは、故人を偲んでお勤めする、当山では年に一度の回向の行事です。回向のお申し込みをいただいた精霊それぞれに経木塔婆(水塔婆)をお作りし、法要当日は各々のお戒名を読み上げて水に浸し、皆様のご先祖様やご縁故の方々に回向申し上げます。

お申し込みの方には、恒例の福引がございます。また法要後には、清興(落語)も開催準備しておりますので、どうぞお楽しみください。ご先祖さまやご縁故の方々を偲び、共に涼んで笑って、良い一日をお過ごしいただけますよう、ご案内申し上げます。

施餓鬼回向法要〔客殿大広間〕
午後1時30分より約1時間

清興(落語)
法要お勤めの後、
準備が整い次第同会場にて

福引〔寺務棟特設会場〕
午前10時頃から

●回向料　5000円より
5体まで一律5000円、6体目からは1体につき1000円。
お申し込み5体ごとに福引券・お供物飲み物券・会場券(大人2名分)をお渡しいたします

●お問合せは、寺務所までお気軽におたずねください。以前お申し込みの方には、6月に改めて案内状をお送りいたします

施餓鬼回向とは…

観音さまのもと、ご先祖さまを含むあらゆる御霊に施しをし(施餓鬼)、その功徳をご先祖さまに回し向けます。人は死後、前生の行いにより浄土に行ったり、飢えに苦しむ餓鬼となったり、また人に生まれ変わったりするとされます。観音さまは普門示現といって、あまねくどの世界でも、姿を変えて現れ、必ずお救いくださるとされます。法要で唱えられるたくさんの陀羅尼は、仏法による施し(法施)を意味します。この陀羅尼は、餓鬼道で苦しむ者たちを救うため、観音さまからお釈迦さまへ、お釈迦さまから弟子の阿難尊者へ、そして今日まで伝わったもの。ここには、いかなる世界の者であれ、必ず救い導くという観音さまの決意が込められています。この功徳をご先祖さまに受け取っていただき、浄土で安らかな日々を過ごしていただけるよう、お祈りいたします。

法話―お不動様からいただく、生きぬく力―①

千葉県館山市 總持院御山主 寺田信彦師

令和6年4月18日 奉讃会婦人部総会にて

今年は辰年でございます。辰といえば竜。十二支の中で唯一架空の動物です。難しい熟語を書くと画龍点睛ですが、龍という字は難しく書けば瀧谷の「瀧」のさんずいを取ったものを、（「がりゅう」ではなく）「がりょう」と読むのです。坂本龍馬がそうでしょう。あるいは龍安寺がそうでしょう。これを「がりょう」と読むのです。点睛の「せい」これは瞳ですね。おめめ。これが漢字の書き取りで間違う。点睛の「せい」は睛と書かなければならないのに、晴と書いてしまって「晴」になるとダメ。答案が返って顔が青くなるという。（一同頷く）

画龍点睛にはこのような話があります。この画龍点睛の故事は、中国の古代南北朝時代の話なのです。中国の南北朝時代は日本の南北朝時代とは違って、隋が国を統一する前までのあいだです。隋が中国を統一するのが西暦589年。その南北朝時代の南京、当時は金陵、建康といった。当時の字で言えば、建康。金陵というのが、雅なことば。今で言えば大阪と言わないで浪速というのと同じです。

その金陵に、安楽寺というお寺が有りました。その安楽寺の壁の四面に張僧繇という画伯が龍の絵を描きましたが、四面とも瞳の点を打っていないのです。周りの人が「張さん、あんたの描いた龍は眼がないよ。点がないじゃないか、瞳がないじゃないか」と言いましたが、画伯曰く「何、俺が点を入れるとな、龍に命が入ってしまって生きて出ちゃうからだ」「そんな馬鹿なことがあるものか」「よし、しかと見ておれ」と、ある一面の龍の眼に点を、つまり瞳をポチッと入れました。そしたらたちまちに、ダーッと風が吹いてきて、雨が降って、ピカーっと稲光が鳴って、その龍がバーっと外へ出てしまいました。まわりの点を入れなかった龍はそのままでした。

そこで画龍点睛というのは最後の一つという意味です。これが最後の仕事だということ。だから和歌でも返しでも、この最後の一文字が効いたのだよなという。現在でも、最後の一仕事。悪く言うと、画龍点睛を欠くということですか。どういうことかというと、あんな良い宴会だったけどな。でも帰りの手土産がなくちゃ、画龍点睛を欠くね、という最後のっていう意味。画龍点睛を欠くという事は、最後のきちっとした仕事までやらなかったということ。だから画龍点睛とは、龍に瞳を入れる、最後のきちっとした仕事までする。そうすると瞳を入れたら命が宿ってしまった。

それと同様の話が、「五筆和尚」。これは弘法大師 空海さまの唐においてのお名前です。弘法大師 空海さまは西暦804年に真言密教の勉強をしようとし唐へ行きました。そして唐で真言密教の勉強だけでなく、文字の勉強もしました。隷書体だ草書体だ、飛白体。そして、文字の勉強をしているうちに王羲之[1]、これはすばらしい書だな、と。

王羲之の書は今一枚も残っておらず皆写したものです。なぜかというと、唐の太宗という皇帝が、王羲之を大好きで、俺は王羲之のファンだ。王羲之の書いた書を俺に全部持ってこい。と、皆持って来させて、最後は自分が死ぬとき俺はこれと一緒に死ぬと言って、皆墓の中に入れてしまいました。だから王羲之の書は一枚も残っていません。

（宮廷に）その王羲之の書の書いてある部屋があります。弘法大師さんは書がうまいと有名だから、唐の皇帝が「空海さん、うちの壁に書を書いてくれないか。右側に王羲之のものが書いてあるから」皆これは辞退するだろうと思いましたが、「よろしゅうございます。書いてみましょう」それでなんと、両手、両足、口に筆を含んで一気に書きました。両手、両足、口だから五です。これはすばらしいということで、唐の皇帝から、五筆和尚という名前をいただいたのです。だから中国では、五筆和尚ということで知られるようになりました。

京都の東寺には、『弘法大師行状絵詞』という巻物が残っています。東寺には後七日御修法[2]というのがあり、私が専修学院[3]の院長のときに、毎年院生を連れて東寺へ行くのです。東寺へ行くから『弘法大師行状絵詞』を見たいと思い、「ありますか」と聞きますが「今貸し出し中です。これは重要文化財で室町時代のものです。お見せするわけにはいきません」4年専修学院に居ましたが、4回ともとうとう見せてくれませんでした。見たいな、見たいなと思っていましたが、実物は見たことがありません。

その『弘法大師行状絵詞』の中に「五筆和尚」という話があります。さっきの龍の話です、弘法大師さんが、唐の道を歩いていたら、そこに五髻童子という頭にグルグルっとした髷が五つある子供が歩いてきて、「あなたは五筆和尚ですか」と聞きました。「そうだけども」「私と技比べしませんか」と言います。「おお、いいよ」「じゃあ。まず空中に絵が描けますか。字が書けますか」「書いてみようじゃないか」まず童子が書きました。そうすると空中に字が書けます。「じゃあワシも書いてみよう」と言ってお大師さんが書きました。「では流れる水に字は書けますか」そうするとお大師さんが書いたその字が書いた字の通りにバラバラにならないで水に流れました。そうすると五髻童子が「すごいですね。じゃあ私が書いてみましょう」と言って、龍の字を書いたらそれも流れずに行きました。するとお大師さんがにっこり笑って「では私が点を入れて進ぜよう」。

龍の字は、右側がチョンチョンとゴジラの尻尾みたいなのがあるでしょう。あそこに点を入れたらなんと龍に命が宿って見る見るうちにバーっと本当の龍の姿になって空へ上がって行きました。すると同時に、五髻童子も空へ上がって行き何も無くなってしまいました。それでお大師様のところには、五髻童子の胸元の袈裟の一部が残りました。これは条帛[4]と言うのだけれども。種明かしがあって、実は五髻童子は文殊菩薩の化身で、そして、弘法大師 空海さまの力量を試そうとして技比べをしたという話。これが『弘法大師行状絵詞』に書いてあります。

これは一体何の話かというと、書いたもの、それは確かに字だ。でも字だけれども、それに命が宿る。そして書いたものを見れば、書いた人の気持ち、あるいは、見た人の気持ちがお互いに通じ合える。言葉は消えるかもしれないけど、書いた時の感情とか、感動とか、感じ方とかというのは、その言葉を通して実際の物のように残るではないか、というエピソードです。

考えてみれば、私たち 今この世の中で私が皆さま方に話をしています。その言葉は、皆さま方の心の中にある程度残っていきます。皆さま方が帰るときにプリントをもらうから、そのプリントを見て、あの時あのお坊さんはこういうこと言ったな。と、また蘇ってくる。それから考えると、私たちがこの世でやったこと、したこと。例えば皆さん方にもあの言葉は忘れない、という言葉があるでしょう。私はあのお姑さんから受けた言葉は今でも悔しくて忘れない。というのは絶対にあるはずです。うちのかみさんもよく言うのですが、姑はもう死んでいるのです。だけど言ったこととか、やった事とかは残るのですよ。うっかりした事を言わない、しない事ですね。ずっと残るから。良いことは意外と忘れるのだよ。だって、「そんなこと言ったって、お前、お袋こうやってくれただろう」と言うと「忘れた」って。（一同、笑）でも悔しいことだけは覚えていると、今でも言います。

残る事ってありますね。だから、よく死ねば終わりだと言うでしょう。終わりではないのに。死んでも残る、やったこと、言ったことは。この考えがないと「死んでしまって終わったからもうそれでいいよ」と。変な話、「お通夜も葬儀もしないで、俺の骨はどこかに撒いてくれ」という。お前の骨は撒くかもしれないけど、お前の言ったこと、やったことは残るのだよ。それを忘れちゃいけない。（つづく。紙面の都合上、冒頭部を省略しました）

---

1 中国、東晋の書家（300年頃～360年頃）。「書聖」と称される。

2 毎年1月8～14日の7日間、東寺で玉体安穏、国家隆昌を祈念し行われる法要。

3 真言宗智山派の総本山 智積院の僧侶養成機関、智山専修学院。

4 菩薩や明王などが、左肩から右脇へたすきのように体に巻いている、細い布のこと。

令和11年 酉年（とり）記念事業 第1

法楽殿改装工事のお知らせ

ご本尊 お不動様は酉年の守り本尊として知られ、瀧谷不動尊では、12年に1度の酉年ごとに記念事業を行なっております。今般、来たる令和11年（西暦2029年）酉年記念事業の第1弾として、法楽殿の改装工事を実施いたします。

当山の境内ほぼ中央に位置する法楽殿は、交通安全祈願所として昭和39年に建立され、以来61年間、交通の無事を願う多くのご信徒みなさまの祈りの場となってきました。しかしながら近年は、内装や外壁塗装の傷みが目立つとともに、南面に大きな開口を持つことから夏場の暑熱の問題に悩まされていました。

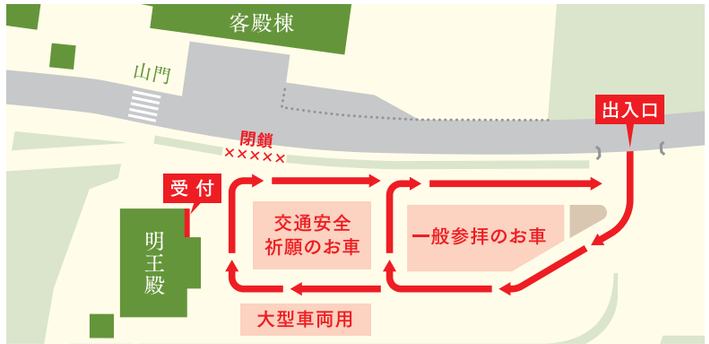
今回の改装工事では、南面に断熱ガラスの囲いをするとともに冷房設備を導入し、快適にお参りいただける環境を整備いたします。内装面では、外陣（げじん）（ご信徒の方がお参りするスペース）の拡張を行います。

工事期間は令和7年6月から約5ヶ月を予定しており、その間の交通安全祈願は、法楽殿ではなく第一駐車場前の明王殿でお勤めいたします。工事期間は、第一駐車場でのお車の導線が変更になりますので、下記見取り図をご確認ください。

今回の工事では、内陣（ないじん）が手狭になることから荘厳具を更新する必要があり、あわせて直射日光による損傷が激しかった外陣の仏具の更新を計画しております。つきましては、お施主様をお募りしたく、工事の進み具合に応じ追ってご案内を申し上げます。皆様には何かとご多端の折まことに恐縮ではございますが、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

法楽殿改装工事

- 期間　令和7年6月から約5ヶ月間
- 仏具奉納の募集は、Webサイト、秋季号等で追ってご案内いたします。



お寺のごはん 16 まき寿司

すっかり春めいてお寿司が恋しくなってまいりました。お酢を合わせたご飯は、ひんやりと口当たりの良いものでございます。

まき寿司を、いつもの具材に旬の蕗を加えて、春の香りと苦味を楽しむことにいたしましょう。

まき寿司は総合芸術のようなもので、それぞれがいくら美味しく出来上がっても、合わせた時バラバラでまとまりのないことがしばしばで、私はまだ一度も得意だった母のお味に達したことはございません。

材　料

●高野豆腐　●干瓢　●干椎茸　●蕗　●いた海苔　●べに生姜
●昆布だし　●砂糖　●うすくち醤油　●こいくち醤油

作り方

●高野豆腐は昆布だしにお砂糖　お塩　うすくち醤油で、干瓢は戻しておなじく昆布だしにお砂糖　うすくち醤油で煮含めておきます。

●干椎茸は戻し汁に昆布だしを足して煮ます。お砂糖　お醤油で煮含めます。椎茸はこいくち醤油がいいでしょう。蕗は色よくゆがいて色止めをいたします。筋をとって、少し濃いめにお色をつけたおだしにつけておきます。

●ご飯は炊き立ての熱いうちに合わせ酢を回しかけて、うちわであおぎながら水分を飛ばします。お酢のお味やご飯の柔らかさなどはお好みでお願いいたします。私は柔らかいのが好きなので、お水加減は普通で炊きます。巻き簾にいた海苔をしきご飯を広げ、具材を乗せくるんと巻きます。巻いてから少し時間を置いて全体のお味をなじませた方が美味しいように思います。蕗の香りが春らしくて食欲をそそります。

お寿司は十月頃も美味しいですし、また真冬の寒い時には、蒸し寿司にいたしますととても体が温まります。お精進のお寿司は江戸前のとでは、おいしい時期や楽しみ方も少し違うような気がいたします。